見本

社会教育課
社会教育係

この人に学びたい

― 掛川の偉人ものがたり ―

写真：「赤堀四郎」銅像前で学ぶ子どもたち ―― 千浜小にて

掛川の教科書

掛川市教育委員会

71 掛川の産業の発展につくした

山崎　千三郎

江戸時代、現在の掛川市西町にあった山崎家は、掛川藩や横須賀藩などの御用金を用意するほどの大きな商家でした。

山崎千三郎は、1856年（安政3年）3月にこの家に生まれました。明治維新後、山崎家は旧藩に貸していたお金を山林や田畑にかえると、所有する山林は三方原、大井川上流、天城山におよび、県下屈指の大富豪となりました。

裕福な家に生まれた千三郎でしたが、むだづかいはせず、とてもかしこい子どもでした。やがて、公共のためになることなら私財をも投入し、どんな努力もおしまないという気風を父や兄から見習い成長しました。

15才で山崎家をついだ千三郎は、掛川は茶産業で経済を豊かにすることができるにちがいないと考え、遠州一円の製茶業者に呼びかけ、製茶再生工場を横浜に作りました。掛川茶を外国に輸出したのです。やがてその工場を静岡に移し、清水港をお茶の貿易港とするなど、現在の輸出業の基盤を作りました。この間には、多額のお金を出して掛川銀行を作り、初代の頭取となりました。また、茶業を発展させるために必要なお金も出したのです。

千三郎は、上内田と南郷とをつなぐ青田トンネルの開通や海岸線を通る予定であった東海道本線（1889年〈明治22年〉開通）を今の路線に変更するなど、掛川地方の鉄道や道路整備にも力をつくしました。

1891年(明治24年)に、掛川と森とを結ぶ森街道が開通しましたが、千三郎は、その原動力となりました。さらに、自分のお金でその沿道の土地を買い、鉄道馬車を走らせ、住民の交通の便をよくしました。

その後、掛川から二俣までの鉄道の開通を計画し、掛川鉄道株式会社を作りました。掛川から北の山間地で生産される茶や農林特産物を京浜地帯へ輸送し、山間地域の繁栄を図ろうとしたのです。しかし、中央政府に働きかけを進めていた1896年（明治29年）7月4日、千三郎は、病にたおれ亡くなりました。残念ながらこの計画は実現しませんでしたが、後の二俣線（現在の天竜浜名湖鉄道）の開通を促進することになったのです。

千三郎は、このほかにも水不足で苦しんでいた掛川の人々のために大井川から用水を引くという計画をたて、測量を進めました。このときの資料は、1972年（昭和47年）に完成した大井川右岸用水の工事計画の基となったのです。まさに、時代の先を見通して郷土の発展につくした千三郎でした。

松ヶ岡（旧 山崎家住宅）長屋門

山崎千三郎の家は、たいへん立派だったので1878年の明治天皇の御巡幸の際の宿泊所となりました。
その時の記念碑が今も残っています。（掛川市十王）

77 日本の金融論の基礎を築いた研究者

山崎　覚次郎

1868年（明治元年）6月に、山崎家（松ヶ岡）の長男として生まれました。覚次郎の伯父は、郷土の発展に尽くした山崎千三郎です。

覚次郎は、冀北学舎（倉真にあった私塾）で勉強し、岡田良平（のちに京都帝国大学総長や文部大臣などを歴任）や一木喜徳郎（のちに文部大臣や宮内省大臣などを歴任）とともに「冀北三羽ガラス」と言われたほどの秀才でした。

山崎覚次郎の生家

1889年（明治22年）に、帝国大学法科大学（今の東京大学）政治学科を卒業し、1891年（明治24年）に、ドイツへ留学しました。

1906年（明治39年）には、東京帝国大学法科大学（今の東京大学）の教授になりました。1919年（大正8年）に、東京帝国大学経済学部が作られると経済学部の教授になり、1920年（大正9年）から1923年（大正12年）まで、経済学部長を務めました。

また、1926年（大正15年）から1930年（昭和5年）まで、東宮職御用係（のちに宮内省御用係、今の宮内庁）として、皇室の

国際金融問題の顧問役になりました。

さらには、中央大学の教授や学部長、理事を経て、日銀顧問なども歴任し、1943年（昭和18年）には、新たに設立された金融学会の初代理事長に就任しました。

日本の経済が近代化に向けて動き出していた時代に、銀行や貨幣の役割と金融の基本的な理論を紹介し、この研究の基礎を築いた業績は大変立派なものでした。

また、金を基準にした貨幣流通の決まりが定まらない世界的な動きについての評論活動を行い、多くの人々に影響を与えました。

覚次郎は、1945年（昭和20年）6月28日に、78歳で亡くなりましたが、こうした研究などを著した書物は、ほかの学者や研究している人々、学生たちの参考書になりました。

松ヶ岡（旧 山崎家住宅）長屋門